

左千夫の人麿論

山根 巴

一 はじめに

伊藤左千夫が何によって、いつ、いかにして万葉集に接しはじめたかについて、土屋文明氏は次のように述べておられる。

明治二十九年頃、桐の舎関澄桂子の歌会に出席しはじめた頃と見える。この年左千夫は万葉集古義の予約出版に予約して居る。桂子は橋東世子の門人であり、東世子は守部の子冬照の妻であるから、桂子も広い意味では万葉派と呼べないこともなからう。そこで左千夫が真淵を知り万葉に親しんだのは極めて自然なことであつた。しかし、桂子の作品から、溯つては東世子の作品から、万葉風のものを探すのは困難であらうし、恐らくは彼女たちから深い万葉の理解を求めることは更に困難であらう。左千夫が万葉に傾倒したのは、彼の天性に何か万葉的のところがあり、理屈ぬきに好きになつたと見てよいだらう。(雑誌『短歌』連載「伊藤左千夫」第九回―左千夫と万葉集 昭和33・9。傍点筆者)

所与の条件がどれだけ整っていても、当人に素質のそうなるものがなければお話にならないのだが、左千夫にはさいわいそれがあつた、そうなるものを持っていたといふことができる、私もかねが

ね思っている。ここで、正岡子規の万葉尊重とのかかわりが問題になってくるが、その点に触れて土屋氏は、上に続けて次のように述べられている。

子規は始めから万葉集一本槍であつたとはいへない。寧ろ子規のもつて居る短歌観に一番あてはまるものは万葉であり、万葉以外これに並べられるものはないと言ふ程度のものであつたといつてよい。しかし、左千夫が子規のもとに行つた三十三年頃は、子規の万葉尊重もやうやく本格的になつて居たから、そこで左千夫が従来もつて居た万葉好みを大いに助長したといふことにならう。(同前)

左千夫が子規をはじめて訪ねたのは、明治三十三年一月三日である(子規三十四歳、左千夫三十七歳)。万葉に関する主要な論考に限っていえば、子規は、「万葉集卷十六」をすでに発表して(明治32・2〜3)、「万葉集を読む」の準備にかかり(同33・5〜7)、ようやくこれへの理解も深まって来つたあつた。左千夫にしてみれば、そういう子規であることを心得ての入門であり、それだけに、子規の持つすべてを自分のものにしたといふ意欲が漲っていたのである。

とはいえ、その強烈な個性を没してしまふことは、左千夫にはとらうていできなかつた。子規を受けて立つという基本的立場で、しかも、彼の個性を存分に生かすという、いわば両刀を使ったのである。かくて、左千夫独自の万葉論——人麿・赤人・憶良・家持論を逐次展開するとともに、その天性のままに、きわめて万葉びと的、また人麿的なものを体臭のように感じさせる作歌を、折にふれては成すに至るのである。

二 「万葉論」の人麿論

「万葉論」(明治36・6) 一篇の立論の特色は、作者を時代によって考察し、その差別と発展の相の解明を志向するについて、これを絵画史に比較し、さらに作風の変化を、用いた枕詞の多少にもとづく修辭的見地にたつて論じたところに見ることが出来る。

つまり彼によると、万葉には前期と後期とがあつて、前期の特質を代表するものは人麿であり、後期のそれを代表するものは憶良・赤人・家持である。前期の特質は形式趣味の洗練と完成であり、後期のそれはよりやく形式趣味から、写実趣味がその開発と完成への途を歩みつつあるところにある。(1) 人麿はこれを雪舟・周文に、憶良・家持はこれを呉春・応挙になぞらえることができる。枕詞を用いている歌をもつて、すべてそれが形式派の歌だとは一概に断定しがないが、例えば、人麿の羈旅歌八首(巻三―二四九―二五六)のうち、これを用いたものが五首もあり、一方、憶良や赤人にはこの使用が少ないので、前期と後期の区別を説明するのに、これの使用の如何を数えるのは便利であるとする。

万葉・古今・新古今と並べて、これらの歌の相違を形式・技巧の

点より比較考察した結果、万葉を、その形式・技巧の点よりのみ力説していた「新歌論」(明治34・3) 6、「統新歌論」(同34・11) 35・3) にくらべると、立論の方法・思考の過程にいちじるしい進展が見られるのである。その進展が彼に、万葉集に主調子と主意味の二流があることを認めさせた。「万葉集は一篇の歌集と云ふと雖も其の包蔵する所頗る広大にして、文運の変化、発達拡充の跡極めて複雑なるは前述せるが如し。之を二大別して、主調子即ち形式派之を人麿派と云ふべく、主意味即ち写実派之を憶良赤人派と云ふべく、更に詳に云へば、形式派成功時代と写実派開達時代と云ふべし。」(左千夫歌論集 卷一 一二五―一二六) と述べている。

「事実を直写したる歌も決して少からず」(同前 七) とは言つたが、それ以上に及ばなかつた「新歌論」とくらべて、明確に二大別したことは、彼のここにいわゆる「写実」が、「事実を主とする」(同前) というほどの意味で、その点多少広漠としたところはあるけれども、やはり重要である。

ここには、憶良赤人派と言うが、これに家持も加わることは上に述べたとおりである。彼らが、「意味を主として調子を次にせる趣」(同前 一二〇) を特徴とするのに対し、「人麿派の歌には如斯調子蕪雜なるものは一首も見ることが得ず。」(同前) とした。憶良・赤人・家持への左千夫の不満は、その歌調の蕪雜ということにある。しかし、反面、例えば赤人の価値を「写実の新生面」(同前 一二一) に認めて、「比較上劣れりとなし未だしとなす所の憶良赤人の精神を継いで、より進歩的写実趣味の成功を遂げ」(同前 一二六) るのが、「吾が同志の研究進路」(同前) であると言ひ、完成した形式趣味・主調子趣味は、「單純にして変化に乏しく、到

底時代思想に適応せざるを以て」(同前)、彼本来の好むところでありながら、抛ることができない。抛ることのできるものは、時代思想に適応した写真趣味・主内容の趣味である。これについて、「憶良赤人」に取る所は歌の成功にあらざりして、革新精神に存す。故に思想の進歩は是を憶良赤人に帰せざるを得ず。吾輩が人麿に抛らずして、憶良赤人に抛らむとするは是が為なり。」(同前 一二六—一二七)と述べ、革新精神を「時代思想」としてとらえるみずからの立場を明らかにしている。

単純で変化に乏しくて、とうてい時代思想に適応しないから、人麿をもって代表される形式派にはつかないとする言い分には、「美術文学界に於ける趣味の拡充進歩」(同前 一一二—一二)を志す彼の、時代に順応しようとする氣息をうかがうことができると思う。

彼にとって、しかし、写真はどこまでも形式あつてのものであつた。「予は猶終に臨んで一言を添へむ。」(同前 一二八)として、「歌其の物は元來形式的文学なれば、茲に所謂写真とは其の形式的なる歌の上に於ての写実なることを忘るべからず。」(同前)と述べるところに、それはあきらかである。いま自分は、写真派の憶良・赤人らにところとするけれども、一方の形式派を代表する人麿に不動の価値を認めているということを、この一節は物語っていると云えないだろうか。つまり、憶良・赤人・家持の歌の価値は、いわば流行のそれであるのに対して、人麿の歌の価値は不易のそれであるとする。「万葉論」で人麿を「形式派の代表者」と見なしたところには、これだけの意味を考えてよからうと思ふ。

—そんな次第なので、「万葉集新釈」(明87・2「馬酔木」)同44・9「アララギ」)において人麿に対して不満を述べたことは、

まさに瞠目に値するのである。

三 「万葉集新釈」の人麿論

「万葉論」の七年後、明治四十三年四月「アララギ」所載の「万葉集新釈」において、左千夫は、人麿の「過近江荒都時歌」(巻一二九)について不満を感じ、考究熟察の後、「如何に考へても、人麿の作歌は世に買過ぐされて居るとの念が去らないのである。」(同前 二八一—二八二)として、「人麿の歌に対する不満の要点」を以下のように示した(同前 二八二—二八三)。

- (一) 文彩余りあつて質是れに伴はざるもの多き事
- (二) 言語の働が往々内容に一致せざる事
- (三) 内容の自然的発現を重んぜずして形式に偏した格調を悦べるの風ある事

(四) 技巧的作為に往々匠氣を認め得ること

(一)(二)とも、衝いているのは「形式」に「内容」が伴っていない点であり、これによって、「万葉論」で人麿を「形式派の代表者」と言つたときの、あの「形式」は、「内容」を伴っていないことが自明となるのである。

では、いつの頃から左千夫は、人麿にこのような不満を持つようになったのだろうか。「予が人麿の作歌につき、多くの不満を感じる様になつたのは、余程以前よりの事である。子規子世を去りて後間もなき程の頃からと記憶する。」(同前 二八一—二八二)とみずから言っている。子規逝去は三十五年九月であるが、その後約十か月を経た「万葉論」にも不満らしいものは見えていないから、やはり「万葉論」以後とみるのが妥当であろう。そしてその後は、一度大

いに人麿の作歌について論じようと、機会の到来するのを待って
たようである。ちゅうど「万葉集新釈」の仕事が進んで、近江の荒
都を過ぎるときの歌になったので、いよいよと意を決した。稿に臨
んでは、「愈多年胸中に蓄積せる問題を解決せねばならぬことの容
易ならざるを思ひて、覚えず戦慄したのである。」(同前 二八二
ペ)と言う。だが、それだけにまた、「稿に対して十数日猶一行も
綴ること能はず、毎日万葉集を手にして、復読幾十回漸く意決し、
心定まるを得たのである。」(同前)とも言っている。
左千夫にとって人麿という対象は、ずいぶん抵抗のあるものであ
った。だから彼は、全力をあげてこれに対決したのである。
以下、それぞれの歌について、評の要点を掲げてみよう。

〈左千夫の人麿作歌評〉

発表年 月(明)	48・4	歌 番号	29	歌 体	長	評 の 要 点 (左千夫の言辭のまま)	総合 評価	×
			31・30		短	……。全篇を通じて理想の見るべきなく、感情の表 現も甚だかすかである。従て首尾一貫せる強い調子 がない。無駄な飾詞が多くて精神が乏しい。……文 彩余りありて質是れに伴はざるの感あるものである。 然かも此の一篇の如きは、其の文彩も趣味的成功し たものではない。 ……。才藻と情調と能く一致して、一首の全体は何 処となく、作者の感動せる心のさまが現れて居る。 擬人法だからとて、作者の胸に動いた心の調子が自 然に現れて居れば、決して捨物の感じは起らぬ。此 の二首の如きは能く擬人法の成功したものである。 ……技巧の上にも表現の上にも遺憾なく成功せる二	○・○	

43	8	43	6		
41	40	39	38	37	36
短	短	短	長	短	長
……。「大官人は」と云へば大官人を主とさして言 へることになる。「大官人の」と言うたので全く大	……。「大官人は」と云へば大官人を主とさして言 へることになる。「大官人の」と言うたので全く大	……。「大官人は」と云へば大官人を主とさして言 へることになる。「大官人の」と言うたので全く大	……。「大官人は」と云へば大官人を主とさして言 へることになる。「大官人の」と言うたので全く大	……。「大官人は」と云へば大官人を主とさして言 へることになる。「大官人の」と言うたので全く大	……。「大官人は」と云へば大官人を主とさして言 へることになる。「大官人の」と言うたので全く大
○	○	○	○	×	○

官人を余所に言うた情味が十分に顯れて居る。さすがに人麿である。能く一字の働に依て極めて細微な感じを叙して居る。艶曲溫柔少しも圭角なき詞の中に限りなき情趣が動いてゐる。如此作意は人麿にして始めて能くすべきことで、又実情に於て始めてなし得べきことだ。無量無限の蘊蓄ある大歌聖の面目を窺ふに足るものがある。

……今の人であるならば、か弱き女の身に於て荒き島を漕ぎめぐるとはいかにわびしがるらむなど、あからさまに言ふ所なれど、人麿ともある歌聖はそんな浅薄な云ひやうはしない。「妹乗るらむか荒き島回を」と云つて説明臭い事は少しも云はぬ。余情限りなきものあるのも此の辺の用意に依るのである。人麿の歌を見るもの殊に注意を要すべきぢや。……

……。人麿が例の自在な詞使と詠みこなしのうまい句調で、無造作に詠まれた作である。……「真木立つ荒山道を石が根のしもと押靡べ」と云ひ、「旗すすきしぬに押靡べ」と云へる六句が、此の歌に於ける内容の實質であるが、是を詩的容積から見ても、詩的言語と云ふ点から見ても、格別に面白いとは思はれないが、是等の句々が有する響には、儘に皇子及び従者の一群が、勢込んで其のみ雪ふる大野に練行く有様が十分現れて居る。此所が此の歌の永久的生命であらう。此の活きたる響が読者をして飽かしめないであらう。……皇子が薙き身を以て、父尊の旧事を深く慕ひ偲ばし、寒風に荒山道を踏み分け行く精神と、其の皇子の精神を心にしめた従者ども、意気と云ふ様な内面の動きが、此の歌の一篇の上に響いてる調子に現れて居るところを味うて見るべきである。……

46	短	……。一首全体が輪廓的になり過ぎて居る。感情の現れと云ふよりは、他の感情を余所から説明したに過ぎない感がある。……宿れる旅人といふ余所所らしい詞があつたり、打靡きなどいふ、此の場合に必要のない飾詞などある為、作者の同情的感情の表現が余程妨げられて居るのである。人麿の歌には往々其の技倆に任せて詠みなぐつた為に失敗した歌がある。以下数首の短歌の如きは儘にそれである。	×
47	短	……。無くもがなの感に堪へない。前歌に比して一層感情に乏しく、全首の語句を通じて何等の響も無い。……只さすがに句調が整うて居る為、読者に厭はしの感を起さしめない。それが僅に此の歌の価値であらうか。……	×
48	短	……。卓抜した詩才で一気呵成に詠まれた歌であるから、大抵の読者は先づ其の外形に眩惑されて終ふのであらうが、能く心を落ちつけて味うて見ると、話の意味は解つても話す人の心持は判らぬといふ様な感ある歌である。余りに文章的に平面に記述されてあつて、作者の感情が、どの句の隅にも現れて居ない。	×
49	短	……。四首の短歌中此の一首最も優れて居る。同じく一気呵成になつた作であるけれど、一首に背景も含まれ、時は来向ふの一句に、作者及び同じ境遇に居る人々と、時間の關係に、感情の動きが含まれて居る。……実に痛切にして壮快感の歌である。かういふ歌を無造作に作つて居るから、人麿は矢張り人麿であると云はねばならぬ。……	○

注 (1) 最下欄の「総合評価」の、×印はそれを難じていることを、○印はそれを賞讃していることを示す。
(2) 「評の要点」の傍線・波状線は、筆者がつけたものである。

「人麿論」とあえて呼んでも、「万葉集新釈」は巻一だけで終わっている。扱った人麿の歌は長歌と短歌あわせて十五首（長4・短11）である。四〇・四一・四二の三首は、不満を述べる以前において扱ったもの（もともと、三十七年十一月といえれば、不満もつって来ている頃であろう）、その他はすべてそれ以後である。

ずいぶん勢いこんで手がけたはずであったが、賞讃したもの（〇印）が難じたもの（×印）の二倍に及んでいる。しかも、「無量無限の蘊蓄ある大歌聖」（四一の歌評）とか、「人麿の人麿たる」（三〇・三一の歌評）とか、まさに絶讃の言辞を呈している（前掲の表、各当該歌の、評の要点の欄参照）。果してこれで、「多年胸

中に蓄積せる問題」の解決になったというものかどうか、考える余地を残しているようである。

△1V人麿の歌であるから

三七の歌、吉野宮に幸せる時の長歌（三六）の反歌で、「見れどあかぬ吉野の河のとこなめの絶ゆることなくまたかへりみむ」の歌を、左千夫は、「読み返して見れば見る程、内容の乏しい歌」（前掲の表、当該歌の、評の要点の欄参照）と評した。内容が乏しいのは、形式に対してである。その点については、「着想に何等の実質がなく、……巧に詞を綾なしただけだ。」と言っている。不満四か条では（一）に該当するものかと思うが、ここで、このように難じたあとに、「併し是れが人麿の歌であるから注文も高く非難も出るのは勿論だ。」と添えているのに注目したいと思う。相手が人麿でなかったならば何もこんなに高い注文もせず、非難もするものではないという心持が、あきらかにここにはある。人麿の歌であるからの一言は、人麿の歌人としての技量をじゅうぶんに認めていることを物

語っている。「予の境遇を以て人麿の作歌を論ずるは、其の責任の極めて大なるを感ずるものから、……」（同前 二八一べ）と言うときの気持と、やはり相通ずるものがある。

力量ある人麿ゆえに、なお飽き足らぬものとして注文も高くするし、非難も出すという。そこには、どこまでも人麿を一人の歌人として、現に一人の歌人である自分が持ちあわせている限りの力でもって相対しようとする姿勢を見ることができぬ。

「万葉集新釈」のこの人麿作歌評は、したがって、この頃の彼の作歌の態度や批評の基準を知るのに恰好のものと言わなければならぬ。

△2V批評の基準

人麿の作歌十五首を批評するに際しての基準は、つづまるところ、一首の、「形式」と「内容」とのかわり具合に終始していると見てもよからうと思う。

ちなみに、賞讃は、「一首全体は何処となく、作者の感動せる心のさまが現れて居る」（三〇・三一）、「感嘆の至情が自然に漲り溢れて」いる（三六）、「誠に穏かな叙事の間に深き思ひが包まれて」いる（四〇）、「少しも圭角なき詞の中に限りなき情趣が動いてゐる」（四一）、「説明臭い事は少しも言はずいて、「余情限りなきもの」がある（四二）、「内面の動きが……一篇の上に響いてる調子に現れて居る」（四五）、「時は来向ふの一句に……感情の動きが含まれて居る」（四九）といった具合になされている。一方、非難は、「無駄な飾詞が多くて精神が乏しい」（二九）、「着想に何等の実質がなく……巧に詞を綾なしただけ」（三七）、「余所余所しい詞……必要のない飾詞などのある為に、作者の同情的感情

の表現が余程妨げられて居る」(四六)、「感情に乏しく…語句を通じて何等の響も無い」(四七)、「文章的に…記述されてあつて、作者の感情が、どの句の隅にも現れて居ない」(四八)といつた具合になされている(前掲の表、各当該歌の、評の要点の欄参照)。

「万葉論」で人麿を、「形式派の代表者」と言つた、その「形式」に対応するものとして、さきに述べたように、不満四か条で左千夫自身が「内容」を用いているので、私もずっとそれにしがたつてきたが、いまこうして、評言につぶさにあたつてみると、「形式」は「詞」「調子」であり、「内容」は「心」「感情」であることがわかつてくる。そして、左千夫の場合、その詞に心があらわれていれば、つまり、作者の感情の動きを調子によって知ることができれば、その一首は賞讃に値した。三〇の短歌など十首は、彼の眼で、まずは詞に心があらわれたものとなつたのである。一方、二九の長歌以下五首は、詞に心があらわれていない——作者の感情の動きを調子によって知ることができないものとなつた。

心と詞が緊密に結びついているものを理想とするのは、紀貫之にまでさかのぼりうることで、決して事あたりしくない。問題は、そういう古人の歌評の基準を、左千夫がいよいよ自分の批評の基準とするようになった時期、またその契機である。子規逝去後まもなく抱きはじめて不満と言うけれども、もはやこの「万葉集新釈」の人麿作歌評では、これだけに強く作者の感情の動き云々の線が出て来ているので、こうなるに至る経過に、ここでどうしても注目しなければならぬ。次項においてあらためて述べようと思ふ。

なおいま一つ、難はすべて、詞が余つて心の不足しているものに向けられているが(左千夫によれば、人麿の作歌には心が余つて詞

の不足したものは無い)、それらと、心詞相具の十首とをどのようにして区別したかの問題がある。尺度は彼の主観なのである。すぐれた主観はやがて客観となるが、彼の場合は、斎藤茂吉も言うように、「批難してゐるうちに感心して居り、感心してゐるかと思ふと批難してゐる。」(柿本人麿評積篇二)の、人麿長歌評積、における、巻一―四五の(鑑賞Vの項)という実情で、「鑑賞標準が動揺常ない」(同前) ⁽²⁾ ということに結局はなると思ふ。この点は、次々項においてまたあらためて述べるはずである。

△3V調子にあらわれた感情の重視へ
——「人麿の歌に対する不満の要点」公表まで——

写実を強調しながら、それもしかし形式あつてのものとする「万葉論」の立場は、「心のみはいかにみやびなりとも調ととのぬはいまだ歌とは云ひがたきなり。」(左千夫歌論集 卷三 二二)とした「非新自讃歌論」(明31・2)のそれと究極において同じである。子規入門以前に、こうした「調」重視の態度を彼が持つたことには、賀茂真淵の影響が考えられる。⁽³⁾ この態度は子規師事後も、没後も、ともかく終生つづく。重要なのは、その「調」と「心」とをどういふかたちにおいて把握したかである。

「非新自讃歌論」も「万葉論」も、二つは別々のものと見ている。つまり、二元的にとらえている。それが、「万葉集新釈」の人麿論では、上から見ているように、あきらかに一元のものとしてとらえている。四十三年という年、この年をいま焦点としてさかのぼってみよう。

三十六年六月七月は、「万葉論」発表の時期であるが、これと時を同じうする「仁徳天皇之御歌」のなかに、調子にあらわれた感情

を重視した発言が、一か所ならずある。例えば、「山背にいしけとりやまいしけしがあがもふつまにいしき逢はむかも」を評して、「此の歌……急迫せる調子を以て能く其の急迫せる感情を發揮せり。」(同前 卷一 三七九べ)と言っているところ。調子が感情をあらわしているとする——二者を一つのものとしてとらえているのである。管見では、これ以前の論考にはこの種の発言は見えないから、ここを起点とすることができようか。

ともあれ、一方に「万葉論」があり、その後も「万葉集新釈」に至って、三十七年七月、「うつせみの命を惜しみ浪にひで伊良ごのしまの玉藻かりはむ」(卷一―二三。時の人)を評して、「麻績王に深き同情を寄せたあはれな心が意味以外の調子に能く顕れてある。」

(同前 一六〇べ)と、調子にこもる作者の感情に留意するかと思えば、その翌年一月には、「わぎもこをいざみの山を高みかもやまとの見えぬ国遠みかも」(卷一―四四。石上大臣)を評して、「是等の歌から見ると、今世人の歌の音調の蕪雑なる情ない有様と云はねばならぬ。内容の趣味優れて居つても、音調が整はなければ、例へば絵画の図案がよくとも彩色の悪いのと同じく、観者にそれほどの趣味感を与えることが出来ぬのである。」(同前 一八四べ)と述べて、両者の対立を説いている。また、同じ年七月には、「おほぶねのつしまの渡り渡なかにぬさとりむけてはや帰りこね」(卷一―六二。春日蔵首老)を評して、「意味単純なだけ調子が暢達して一読快活を感じる。平凡なことも云ひ様で活きて来る。却て韻文の真価値は如此点に存するのではあるまいかと思はれる。」(同前 二〇二べ)と、重点を意味よりも調子においた言葉を吐いている。——このような有様で、どうも主張に一本とおったものがない。

「仁徳天皇之御歌」において、二者を一元化する方向が見えていたけれども、三十八年に至ってなおこのように主張に混乱があるといふことは、やはりまだ彼が、二つのものを二つのものとして、つまり対立的なものとして理解していることを意味すると思う。

しかし、三十八年も後半期にかかる頃からは、さきの「山背に」や「うつせみの」の歌評、そして、人麿作の四〇・四一・四二の歌評(前掲の表、各当該歌の、評の要点の欄参照)に見えた二者一元化の方向が、かなり強くなっていくようである。それは例えば、五月に、「おほとものみ津の浜なる忘貝家なる妹を忘れて思へや」

(卷一―六八。身人部王)を評して、「真に本気になつて寧ろ泣顔をして妻女の誤解を云ひとかんとせる趣が、能く一首の調子の上に顕れて居る。意味はそれほど働いて居らぬが、調子の上にそれが見える。……万葉集の歌の最も味ふべき点である。……今の人は只々詞調の整はんことにのみ力を入れて此の真情の溢るる自然の発動をおろそかにして居る。」(同前 一九三べ)と述べているのでも、また七月、「こせ山のつらつら椿つらつらに見つしぬばなこせの春野を」(卷一―五四。坂門人足)を評して、「感興まづ湧いて眼に映じた重なる事物を取つて直に詞に綴る。如何にも無造作な調子に出でくる故、想と詞との区別を感じる暇がない。古人のうまい所がそこに在るのである。序歌と雖も決して拵へ物の感じがない。想と詞と自然的に融合して居るからである。」(同前 二〇〇べ)と言っているのでもうかがえる。

前者の、「真情の溢るる自然の発動云々」の発言は、これまでにまったくなかったものだけに注意したい。彼の眼がいよいよここに向けられはじめた——作者の感情の発現を重視しはじめたと言えるも

のである。

後者では、「感興まづ湧いて」としている。四十一年十月の「田安宗武の歌と僧良寛の歌」において、これは「感情の自然流露説」⁽⁴⁾となり、やがて「叫びの説」に発展するのである。なお、「無造作な調子云々」は、三十九年十月の「八面歌論」で「無造作説」⁽⁵⁾となるもの。「無造作」の意味は、同年三月の「万葉集新釈」で、長皇子の歌(巻一六五)を評して、「万葉の歌は大抵無造作に読んだ歌であるから、成るべく無造作に解釈するのがよいのである。」(同前 二一七べ)と言っている。「無造作」と同じく、「率直に」「ひねくらずに」というほどであろう。人麿作歌評でも、讚辞のなかにこれを二回ほど用いている(四五・四九。前掲の表、各当該歌の、評の要点の欄参照)。ともに、ひねくらずに、の意に解していいと思ふ。五四の歌の場合も、「無造作な調子に出てくる」と言ふ。出てくるものは、内にまず湧いた「感興」である。それが内に充実して、無造作な調子で外部に出るので、想と詞、つまり内容と調子とを区別することができないと言ふのである。とすれば、「感興」の充実こそは、想と詞(内容と調子)とを一元化させるものということになる。彼が、「感興」の充実を重視し、その自然の発動を強調したことは、このように見ることができると思ふ。

要するにそれは、二つのものを一つにするもの、区別をさせないものなのである。一つになって、それは調子の上に出てくる。この、出てくることを、彼は、「流露」すると言った。また、「心の響をさながらにひびける」⁽⁶⁾とも言った。この、「心の響をさながらにひびける」は、晩年の、「言語のひびき」「言語の声化」につながるものである。「田安宗武と僧良寛の歌」では、まだそこまで強く

意識していなかったと見ねばなるまいが、それでもこの一篇は、彼がこれまでに触れてきた作歌の上でのさまざまの問題をほとんど取り扱っていることにおいて、注目すべきものである。

茂吉によれば、左千夫は、「観潮楼歌会に出席して、スバル一派の西洋象徴主義的な作風に接触し、それ等の歌風に対する反感から、特に「ひねくり、こねくり」を排し……、また一方には三井甲之氏一派との葛藤があつて、益々自然流露の歌を希求したといふやうな経路をも有して居る。」(左千夫歌集合評 二〇一べ)と言ふ。じゅうぶん考えられるところであるが、特に、感興の自然による詩作を説いているのは、根本において、親鸞上人の、計らいを否定する精神の影響を受けているものであることが、「アンビ巻頭詞三」⁽⁷⁾(明治39・3)などより知られる。

左千夫自身に即してみれば、四十年四月と五月と、日本新聞に「勾玉日記」(和歌まじりの日記文)を連載して、和歌を、それこそ計らいなくきわめて自在に、楽々とうたいあげてを試みたのもまた、「田安宗武と僧良寛の歌」を内容のあるものとするのに役立つに思ふ。

古人の作ももとよりである。しかし、「勾玉日記」の体験を通して、その理論に厚みの加わつた「田安宗武と僧良寛の歌」を経過した、翌四十二年には、同時代の、しかも彼ともっとも近い関係にある直系門人の作も、もっぱら内容と調子との関係を焦点にして評するようになる。例えば、茂吉の「あなうま粥強飯をすなべて細りし息の太り行くかも」(同年作「細り身」一連のうち)について、「「あなうま」の一句は今一工夫ありたかつた。全体に就いても意味と調子との交渉に今一段の努力がほしかつた。」(明治42・11「ア

ララギ」所載「短歌研究」⁸⁾と言っているあたり、その間の消息をうかがうことができる。

「感興」の充実が歌の内容と調子とを一元化させると考えた三十八年の後半期から九年にかけて、この頃の万葉観は、さきに引用の「万葉の歌は大抵無造作に読んだ歌である云々」によって知られるが、これに続けて、「いつもながら万葉の歌は、作者の感興が能く調子の上に顕れて居るから、詞以外に深き興味を讀者に与へるのである。」(左千夫歌論集 卷一 二一八べ)と言っている。さらには明らかになる。つまり、もうこの時点で、万葉の歌は内容と調子とが一体になっていると見做したのである。四十二年九月の「万葉集新釈」で、中皇命の長歌(巻一―三)を評したあとに、「概して万葉の歌は、浅々しく見て終つては到底其の真味を味ひ得ることが出来ぬ。内容と詩形との關係が極めて自然であるから、内容の動きは必ず調子の上に現れて居る。」(同前 二三九べ)と述べたのは、さきの三十八―九年の言説の発展として、主張をもう一つ徹底させるのに役立っている。四十二年にして、彼の万葉観はここまで進んで来た。関心の焦点は、一首の内容と詩形とのかかわりあいである。あくる四十三年四月、人麿作歌評の基準がここになつてゐるのは、なりゆきとしてごく自然であり、また必然のことと言うべきである。

対象が巻一に限られているのだから、人麿以後といえ、六三の億良の歌だけである。このことを心得た上で、四十二年末までの「万葉集新釈」で扱ったものについてみると、四〇・四一・四二の人麿作歌三首のほかは、人麿以前のものが多きようである。ことに四十二年のごときは、扱ったのは雄略天皇(巻一―一)、舒明天皇

(同―二)、中皇命(同―三・四)、軍王(同―五・六)、中大兄皇子(同―一三・一四)、額田王(同―十六・十七・十八)など、人麿以前のものばかりである。

人麿以前の歌について、「万葉論」では、「枕詞などの使用こそ少なければ、其の高朗円熟なる調子の如何に興味深きかを知らむ」(同前 一一七べ)と述べたが、「万葉集新釈」に至っては、その「高朗円熟なる調子」の上にあつた作者の感情の動きに格別の注意を払い、例えば一三の、中大兄皇子の長歌を、四十二年十一月、「頗る平凡な内容であるが、仔細に詞の調子を吟味して見ると、作者がつくづくと溜息をついて、嘆息したさまが能く現れて居る。」(同前 二五〇べ)としている。翌四十三年も、三月には、二五の天武天皇の長歌を評し、「言語の調子に伝はつて現はれる細微なる作者心裏の動きを感取して味ふべきである。」(同前 二七四べ)と述べているのである。

左千夫の眼には、人麿以前のものは、おおむね作者の感動がそのまま調子の上にあつて居ると映じたのである。次々と取り扱つていくものがみなそうなので、そこには、動じない彼の一つの見解が樹立された。さきの、「概して万葉の歌は云々」にしてしかりである。

このようにして一つの見解が熟していくかたわら、彼はそれをつねに人麿の歌におし及ぼし、みずからの人麿観を培いつつ続けた。人麿以前の歌に比べて――と、終始比較を彼流に試みていたものと思ふ。その結果、人麿のものは、調子に蕪雑なもののみならず、それどころか、むしろその点に意を用いるために、内容との關係が、これまでずっと見てきた人麿以前のものの場合のように、かならずし

も自然ではないという結論に達した。不満の要点四か条は、その兩者の關係の不自然であることを具体的に衝いたものである。

彼の元來の内容調子二元論が、三十八年後半期頃より一元化の方向にむかい、もはやこれを述べる四十三年ではすっかり一元論になったことを、この「人麿の歌に対する不満の要点」四か条の公表は、きわめて端的に物語るものである。

△4V自家撞着の問題

上にも述べたように、人麿の歌について左千夫は、子規逝去後まもなくの頃から不満を抱きはじめて、稿に臨んでは、「愈多年胸中に蓄積せる問題を解決せねばならぬことの容易ならざるを思つて、覚えず戦慄した」と言う。かくして四か条の不満を掲げるのであるから、その後の人麿作歌評への興味と期待はまことに言い知れぬものがあるわけだが、じつは彼によると、「人麿の歌に不満があると云うても、人麿の歌が悉く面白くないと云ふのでは勿論無いので」、「人麿の歌にも随分飽足らぬ歌があると云ふに外ならぬ」（同前二八三べ）のであった。あたかも真淵が、人麿を絶讚しながら、一方に、「上つ代の歌を味ひ見れば、人麿の歌も巧を用ゐたる所、猶後につく方なり云々。」と言っているように。(9)

真淵のこの言を引用したあと、左千夫は不満四か条をあげている。そしてそれは、二九・三七・四六・四七・四八の五首におし及ぼされる。「技倆に任せて詠みなぐつた」（四六）四八。同前 三一六べ。前掲の表、46の、評の要点の欄参照）という評をくだしたのもあるが、もっともきびしいのは、「言語が徒らに豊富で、内容は甚だ貧弱なものである。暗雲と枕詞を使用して居るが、其の枕詞が殆ど虚飾的に配列されてある。虚飾の言語が多過ぎる為に、作者の嘆

息した情意の動きを感じること甚だかすかなのである。……人麿は言語の綾を悦ぶの弊に陥り、浅薄な形式趣味に憧憬した跡があると見ては居つたが、是程に言語を乱用して居るとは思はなかつた。つまり言語を綾なす技巧が其の弊を導いたのである。」(同前 二八三〜二八八べ)という、二九の長歌の評である。この長歌から順を追つて評釈は進むわけで、左千夫としては、それにともない、これまで積り積つていた不満を思いきつてぶちまけたと見るべきであろう。まったく、目についてしかたのなかつた人麿の技巧であつた。

ともあれ、同じ動機の場合の作歌で、失敗したり傑作になつたりするものであろうか。これについては茂吉がすでに触れているのであるが(前出。巻一―四五の八鑑賞Vの項)、⁽¹⁰⁾長歌が愚作で短歌が傑作、また、長歌だけが傑作で短歌が愚作ということが、實際問題としてありうるかどうか。

三〇・三一は賞讚しているけれども、もはやぎりぎりの点にあることを指摘している。これ以上技巧が目立てば、まったく技巧だけのものになってしまうことに注意している。その点で、彼における賞讚と批難の境界を考えさせられるのであるが、△2Vでも述べたように、どこまでをほめてどこからを難ずるかはその主観次第であるから、結局は、その主観の普遍妥当性あるいは客観性如何というわけである。

短所Ⅱ消極的方面、長所Ⅱ積極的方面とする茂吉にしたがえば、⁽¹¹⁾茂吉は徹頭徹尾人麿の積極的方面について述べたということになる。これに対して左千夫は、その消極的方面にも目をつけている。目をつけたというよりむしろ、それが目につきすぎたということになると思う。目につきすぎて、そのつど、問題のその点に言及したが、

一方また人麿の力量をじゅうぶん認めてもいるために、長所と短所を見分ける基準が彼自身の内には必ずあったであろうけれど、そして、彼自身つとめてそれにしたがおうとしたけれど、ぎりぎりの決着をつけるときにはやはり、茂吉も言うように「動揺常ない」ものとなったのである。

ほめているかと思ふとくさす、くさしているかと思ふとほめる、しかも、長歌を激賞するかと思ふと、すぐ後の短歌をいきなり難ずるといふことは、茂吉も言うように、考えられないことである。しかし、左千夫の人麿作歌評にはそれが現実となっている。このことについて茂吉は、「先師の如き優れた作歌力量のあるもので、且つ俊秀な鑑賞眼を持つてゐるものでも、人麿の作に対するときには、その鑑賞眼がかくの如く動揺してゐるのである。和歌を鑑賞することの如何に複雑でむづかしく且つ興味ふかいものだからといふことは、これを見ても分かるのである。」(前出。巻一―四五の八鑑賞Vの項)と述べている。¹²⁾先師への敬意を払いながら、和歌鑑賞のむずかしさを説く茂吉である。たしかにそれは、容易なことではないが、左千夫の場合、もっとその主観が透徹していれば、長歌を賞讃するかと思ふとすぐ後の短歌を難ずるといった、あまりにも恣意的なこと、あるいはしなかつたかもしれぬ。

ひとまずはこのように考へてみるけれども、いまあらためて、彼の人麿論の見られる「万葉集新釈」の公けにされた明治四十三年といふ年を、その歌論の体系においてみると、大正元々二年の「叫びの説」に通ずる、「言語のひびき説」を、十二月(人麿論の終った月)に発表しているのが注目される。左千夫自身がここに至ってなお成長過程にあったことを、このことは如実に物語っていると思ふ。¹³⁾

彼がたえず動いていることを、つまり、みずからのそうした動揺を、「万葉集新釈」のこの人麿論——そこに内在する自家撞着は暴露することになったと見ることができるのであるまいか。

四 結語

以上、左千夫の人麿論を「万葉論」から「万葉集新釈」へと見てきて、そこにたえざる成長のあったことを認めただのであるが、ここで成長という時、その中身に、憶良への共感の深まりがあったことを見のがしてはなるまいと思ふ。

憶良に対する左千夫の評は、「万葉論」の中に、憶良と赤人に新しい写真面を開いた点を認めていることはさきに触れた。彼はそこにおいて、憶良に赤人より高い評価を与えている。そして憶良の作品について、「意味を主として調子を次にせる趣一読して感知するを得む」として、調子の蕪雑であることを認めながら、「然れども是等の歌を反復誦誦吟味すれば、着想の最も自然にして情懷の極めて痛切なるを覚えざればならず。」(左千夫歌論集 巻一 一一〇頁)としている。服部喜美子氏も言われるように、「まさに人麿に対する、「文彩余りあつて質是れに伴はざる、内容の自然的発現を重んぜずして形式に偏する」等の評言と対蹠的な言葉が憶良の作に与えられているのを見出すのである。」¹⁴⁾

「万葉集新釈」では、六三の「いざこどもはや日本へにおほとものみつの浜松まちこひぬらむ」だけを扱っている(明治39・2)。そこではこの歌を、「詞も趣向も別に優れた点のない歌であるが、作者の感情が実に能く調子の上に顕れて居るのは、見のがすことの出来ない処である。」と賞讃し、さらに、「今の人の歌を見よ、内

心の感情を余所にして、調子をコネクリ詞をヒネクリするから、感じといふものが顕れて居らない。(同前 二〇四べ)としてゐるのである。

その後は、「叫びと話」(大正元・9)同2・2)において、「銀もくがねも玉も何せむにまされる宝子にしかめやも」(巻五八〇三)の歌をあげて、「子を思ふ感情よりは、子は大事なものだ可愛いものだといふ考の方が主になつて居る。」(同前 巻二 五八一べ)とする。つづいて、「憶良家持等には拵へた歌が多い。……折を見て憶良と家持の歌を厳肅に吟味して見ようと思つてる。」(同前 五八二べ)と言つてゐるが、五か月後(大正二年七月)に急逝したため、すべては不可能な事となつてしまつた。

思うに、左千夫にもっと齡が許されたならば、「万葉論」で「極めて痛切なる情懷」を認めた憶良の作に対して、その或るものについては、憶良の痛切なる情懷を十分に論じ得たであらう。ことに、「万葉集新釈」での評言において、彼があのように強固に退けようとした「ヒネクリコネクリ」の当時の歌壇に対して、憶良の「作者の感情が実によく調子の上に表れてゐる」作品をもつて警告としてゐる点などを考える時、彼が一生を通じて念じてやまなかつた真情吐露のおとさを憶良の作に見出し出していたと解釈することができよう。そしてそこには、憶良の境地への深い共感があることを思はずにはいられないのである。

左千夫の人麿に対する讚美と傾倒とはまことに大であつた。しかし、そのような共感——憶良の、実生活から足を抜いて風流に遊ぶことも、またそれを離れて客観し、自然の中に思いをひそめ切ることでもできなかった、生真面目で重苦しい、その痛切なる情懷に、自分

と本質的に共感するものを感じとつたこと——は遂にあり得なかつた。

かくて、憶良の「情懷の極めて痛切なる」に打たれば打たれるほど、人麿への不満がつつて来たと見ることもできなくはない。とすれば、その人麿論は、生きてあればかならず成したであらう、憶良の痛切な情懷論の、いわば前提であつたとも見做しうるのである。

【注】

(1) この部分、本間久雄著『続明治文学史 中巻』八八べの記述に負うところが多い。

(2) 『斎藤茂吉全集第二十七巻』五〇九べ。

(3) 「非新自讃歌論」及び「小隠子にこたふ」(明31・2)に、すぐれた歌としてあげてゐるのは万葉二首、古今一首、真淵三首である。この事實は、真淵とのつながりを考えさせる。

(4) 良寛の「山ささにあられたばしるおとはさらさらりさらりさららにひびける此の歌、即ち良寛の人は隅なく此の歌の上に想見せられずや。……作者其の人の心は、何等の障りにも達はず、何等の隔てにも達はず、其の思は其のままに流露せるが故に、意義にも詞にも、いささかのとどこほりを見ざるなり。」(『左千夫歌論集巻二』二三八べ。傍点筆者)と述べてゐる。

(5) 一篇の中に、「……或程度に達した人々に対しては、予は飽くまでも放縱に大胆に無造作に歌を生み出さんことを勧めるのである。無造作に作つて価値ある作物の出るやうでなければいけない。無造作に作つたものでなければ、其の人の特色其の人の自然が顯つて来ない。」(同前 一八五べ)の一節がある。

(6) 注(4)参照。

(7) その冒頭に、「総てに自分の計らひを無くせよと、親鸞上人の

仰せられたのは、吾々文学の上にも誠き深き味ひを感じらる。……」

(同前巻三 六二六)と述べている。

(8) 『左千夫歌論集巻二』四一五頁

(9) 茂吉によれば、真淵のこの言葉は、村田春海が本居大平に贈った手紙の中にあるとのこと(「長谷川如是閑氏の人麿論を読む」の中に言う)。

(10) 「人麿ほどの多力者が、同一動機の場合の作歌で直ぐ失敗したり直ぐ傑作になつたりする筈のものではない。長歌だけが傑作でその反歌が失敗の作だなどといふやうなことは考へられない。」と、注(2)の言説につづけて述べている。

(11) 「人麿評論史略」の中で、「左千夫は……、人麿の消極的方面が力強く働いたのである。人麿の積極的方面についてはそれほど強く云ひあらはさずにとつたと思ふ。」(「斎藤茂吉全集第二十巻」一四三頁)と述べている。

(12) 注(10)の言説につづけて述べて、この△鑑賞▽の項の結びとしてみる。

(13) 土屋氏に、「万葉論では人麿を絶対の作家の如く見た左千夫が、その形式に不満を持つに到つたのも、論の当否は別として、左千夫の生長の一つの姿と見ることは出来よう。」(「短歌」連載「伊藤左千夫」第九回)左千夫と万葉集 昭和83・9)という、示唆深い発言がある。

(14) 「伊藤左千夫と山上憶良」(「美夫君志」第五号△昭和87.5▽所収)において述べられている。

(15) この部分及び、以下の共感についての部分、服部氏の前出の論考に負うところが多い。

【付記】

1 万葉歌をはじめ、引用歌の本文は、すべて左千夫のそれにしたがった。

2 山本健吉氏が、その著『柿本人麿呂』(昭和87・6・10刊)において、左千夫の人麿論に言及されている。氏は、左千夫の評言(不

満)は、人麿の長歌においてことに妥当するとされる。二九の歌の評言がそこに掲げられるが、続けて、「作者が今日から見れば内容貧弱で虚飾的な枕詞その他をどうして用ゐるに到つたかといふ、時の動機にまで考へめぐらすことをしなかつたといふ点で、不当の評言であらう。」と述べられる。肯えるが、当時の左千夫にそこまで要求するのは、いささか酷であらう。さらに、三六・三八の歌の評言を掲げて、「前者が虚飾的で内容貧弱であれば、後者とて同じく修辭過多の弊を露出してゐるのであつて、作者の「語意」が直接表現されてゐない点では、どちらも同じと言ふべきなのだ。」とされる(一〇三〜一〇四頁)。他に二二五〜二二六頁でも言及されている。茂吉の言説(注2・10・12)ともども、注目したいと思う。

3 本稿の初稿は昭和三十六年五月に成ったが、四十九年五〜六月に補訂を加えることをした。